

偉大なるお節介症候群

～ニューモアに溢れ、心優しく、俯瞰的な大局観のある人物～

「偉大なるお節介症候群友の会」最高顧問 樋野 興夫

『教養ある人間とは、「自分のあらゆる行動に普遍性の烙印を押すこと」であり、「自己の特殊性を放棄して普遍的な原則に従って行為する人間」のことである。それは人間の直接的な衝動や熱情によって行動する代りに、つねに理論的な態度をとるように訓練されることである。』{南原繁(1889-1974) 著作集第3巻より}。「ニューモアに溢れ、心優しく、俯瞰的な大局観のある人物」の育成訓練でもある。まさに、

- (1) 世の流行り廃りに一喜一憂せず、あくせくしない態度
- (2) 軽やかに、そしてものを楽しむ。自らの強みを基盤とする
- (3) 新しいことにも、自分の知らないことにも謙虚で、常に前に向かって努力する

であり、「本質的な人間教育の見直し」の時代的様相である。

思えば、日本国の女子教育の草分け的人物には、新渡戸稲造(1862-1933)の名前が挙げられる。「ハンサム・ウーマン」「a person who does handsome」『(新島襄(1843-1890)が、妻：八重(来年NHK大河ドラマの主人公)について英文手紙(1875年)で記述)』の時代的到來である。外面より内面を重視した新島襄の「愛を以てこれを貫く」教育観は『いじめ』問題が指摘される昨今にこそ、大いに学びとなるのではなからうか！

「新島襄生誕170周年記念シンポ」の開催に向けて『新島襄記念がん哲学外来カフェ』の「テーマソング～愛を以てこれを貫く～」がシンポで、披露される事であろう。『新島襄』を輩出した群馬には、「内村鑑三記念がん哲学外来」が先行して存在している。上毛カルタでも知られる群馬の偉人「新島襄・内村鑑三」の時代的出番である。内村鑑三(1861-1930)『デンマーク国の話』の「外に失いしところのものを内において取り返すを得べし」の言葉が甦った。「病気 vs 病人」の違いを静思する時である。

3月には、不登校の生徒らを招待した「神谷美恵子記念 がん哲学外来カフェ in 長島愛生園」が企画されているとのことである。これこそ、『当事者研究』による、「真の教育刷新」ではなからうか！？

フェイスブックをしている人から、去年の「いいね！」のトップは、「偉大なるお節介症候群」認定証との連絡があった。一見「理解不能モード」である複雑な現代社会・混沌の中で「偉大なるお節介症候群」は「日本国の処方箋」ともなろう。

集学的がん診療センター
市民公開シンポジウム

時：2013年2月2日(土)
13:30～16:00
所：福井県済生会病院
本館2階 研修講堂



和泉市のがんケア講演会

時：2013年2月11日(祝)
13:30～16:00
所：上智大学
グリーンケア研究所
(大阪大司教区
カトリックセンター)
サクラファミリア2階



神谷美恵子記念がん哲学外来
第6回カフェ in 長島愛生園
記念講演

時：2013年3月26日(火)
13:30～14:30
所：国立療養所長島愛生園
愛生会館



当院は、2011年6月より樋野先生をお招きし、「浅井三姉妹記念がん哲学外来」を1年2回開催しています。また2011年8月より、毎月第1週目の金曜日にメディカルカフェを開催しています。

メディカルカフェに参加されている患者さんが、樋野先生とのじっくりとした対話を希望されて、がん哲学外来に参加されることもあるし、がん哲学外来に参加した後に、もっと多くの仲間との話し合いを求めてメディカルカフェに参加される方もいらっしゃいます。その時々々の患者さんのニーズに合わせて、選択できる場を提供しています。

初めての開催の前に樋野先生から、抹茶ラテが好みとお聞きし「抹茶ラテを作る」と決めました。院内のカフェには、そんな洒落た？飲み物はないからです。

様々な“抹茶ラテの素”を購入し試飲しましたが、どれも甘ったるいだけで味に深みがありません。「おいしい抹茶ラテを用意出来ない⇒機嫌を損ねる⇒患者さんとの対話にも影響がでてしまうのでは？」と焦りました。

そして最終的に辿り着いたのが、「三國屋善五郎」という地元福井のお茶屋の“抹茶オーレ”でした。香り高く、お茶の味が濃い。甘すぎず、お茶屋クオリティを感じます。たつぷりと粉末の素を入れて熱いお湯を注ぎ、仕上げに牛乳をいれます。レシピ通りに作るとおいしくできました。

当日1杯目が空になり、樋野先生に「お飲み物はどうしますか？」とお聞きすると「抹茶ラテがいいね」と笑顔で言われました。心の中でガッツポーズを取ったのは、言うまでもありません。参加された方からは「心が安らぎ自信ができました。悩みを持たれている人にとってはこのような場が有ることは幸せなことですね」等の感想を頂きました。

私が「偉大なるお節介症候群認定証」をいただいたのが、抹茶ラテのおかげかどうかは不明ですが、今後も樋野先生を抹茶ラテでお迎えし、また、がん哲学外来や、メディカルカフェに来て頂いた方を、「温かく迎える人」でありたいと思います。



カフェ「あずまや」オープン！

あずま在宅医療クリニック 院長 東 英子



1月12日、大阪府守口市にメディカルカフェ あずまやが誕生しました。私は守口市のあずま在宅医療クリニック院長 東 英子と申します。私とがん哲学外来との出会いは、昨年9月に長野県佐久市で行われました第2回がん哲学外来コーディネータ養成講座に参加したことです。平素から心に持っていた思いがここにあると深く共鳴いたしました。以降、遅ればせながら学ばせていただき、各方面の方々のご支援を得て、出会いからわずか4か月という速さで「あずまや」の開設に至りました。折しも、開設の翌日のNHK大河ドラマ「八重の桜」第2話のタイトルは「やむにやまれぬ心」でありまして、私のカフェ開設に対する思いはまさに「やむにやまれぬ」ものであったと思いました。

「あずまや」という名前は、西洋建築のパビリオンの一種「ガゼボ」と、私の苗字「東」をかけております。ガゼボは人々に雨宿りの場所や日陰を提供するものですが、ベンチなどを設けて休息や展望の場としても機能します。「あずまや」はマンションの一室を利用しており、友達の家遊びに行くような気軽さで参加し、ひとときを寛いで過ごしていただければと思っております。

記念すべき第1回には、8名の方が参加されました。患者さん、ご家族、介護を経験された方、友人・知人をがんで亡くされた方、医療機器業者の方などさまざまな立場の方がご自身の思いをお話くださいました。膝をつきあわせ、お茶やお菓子をいただきながら和気あいあいと語り合う雰囲気は初対面とは思えないほど和やかで、楽しい「お家カフェ」となりました。医師から告知されたときの戸惑い、家族同士の交流の大切さ、経済状況が治療内容に影響する不条理、社会における家族支援体制の欠如など深刻な話題のなかにも、大阪らしい笑いやツッコミもある充実した会でありました。「あずまや」が対話の場として地域に根付くよう、参加者の方々と一緒に創っていきたいと思います。

私がメディカルカフェをやりたいと思ったきっかけは、8年前にがんと言われて、無知な私は、東京の大病院で手術しさえすれば治ると思ったことでした。長い手続きを終え、4時間以上待ち、やっと順番が来ました。が、医師の口から出る言葉は冷たいものでした。「ステージ4、何でもっと早く来なかった、抗がん剤治療は苦しいんだぞ、こんなところまで来てどうやって通院するつもりだ、今は入院なんかしないんだぞ、俺だったら緩和ケアを勧めるね…」、次々と話す先生の言葉に私の足は突然震えだし、頭がぐるぐる回って、突然失神してしまいました。ステージって？緩和ケアって何のこと？私は死んでしまうの？がんの告知を受けた患者さんたちはこの瞬間をどう受け止め、ひとりで乗り越えているの？ずっと悩み、泣きました。なぜ私だけがこんな想いをしなければいけないのか、悪いことをした覚えもない、一生懸命に生きてきた。私の周りにそんな人いる？悔しい。納得がいきませんでした。そしてこの気持ちを同じ病気のひとと分かち合いたいと思いました。

先日、2回目のメディカルカフェを開きました。10名の参加がありました。がんの方は3名の参加でしたが、私は自分の肺腺がんについて話しました。脳治療で3回のガンマ治療、気管支、首の骨、腰と次々に転移していることを皆さんに聞いてもらいました。「清里カフェ」では、あせらずに、お互いが苦しかったことや悩み、不安などを話してもらい、また力づけたりしながら私も同じ思いで癒されたいです。今、私は家族4人でメリーゴーラウンドのあるカフェレストランをやっておりますが、身体の調子の良い時は、得意のだんご汁や手料理でもてなしたいです。私が大事にしたいモットーは、思いやりの心です。

私の父は、50歳で亡くなりましたが、戦争で片足のない人でした。母は、店をやりながら4人の子供を育て、手が空いたときは、海軍で覚えた玄米パン、水ようかん、桃やイチジクを煮てくれました。両親の思いやりの心を大切にしてい、私はこれからの「清里メディカルカフェ」を大事にやっていきたいと考えています。

◇佐久カフェの
面々も駆けつけ
ました(第一回)。



吉田富三「お預かり哲学」とがん哲学外来

福島県立医科大学附属病院 医療ソーシャルワーカー 池田 紀子

当院では「吉田富三記念がん哲学外来」の看板を掲げ、毎月1回樋野興夫先生をお迎えし、スターバックス福島医大店の協力で美味しい飲み物を頂きながら、患者様、ご家族様との語らいの場をもっております。福島県出身の世界的病理学者である吉田富三先生のお名前を頂いたがん哲学外来で、様々な悩みや苦しみ、不安などが語られます。時には、思わずお互い笑いあってしまうようなエピソードも語られたりしますが、こらえることの出来ない涙を流しながら、思いを言葉にされる方もいらっしゃいます。

癌研究会顧問でいらっしゃる菅野晴夫先生が著された『吉田富三先生の思い出』（財団法人浅川町吉田富三顕彰会、2012年、97-98頁）によりますと、吉田富三先生は病理学を「死を納得するための学問」と表されながら、一方で「納得のいかない死がある」と述べていらっしゃいます。そして長崎に原子爆弾が投下される1年程前まで長崎におられたというご体験から、次のような考え方を提示されています。「自分のこれからの命というものは、これは自分のものと思ふことができない。どなたか知れないけれども、超人間的な、神であるか、天であるか、そういう者からしばらく預けられたのだと考えると、無理に命を奪い取られた方々に対しても或る公平さが保てる。(中略) 預かりものですから、自分勝手にこれからは使うわけにはいかない。何か人様のお役に立つということを使う以外には、その預かりものだということを実現する方法はないだろう」。

今のこの福島の地で吉田富三先生が実践された「お預かり哲学」を、がん哲学外来を通して学んでいきたいと思ひます。そして、自分の主観でお節介か偉大かの線引きなど出来ないことを潔く認め、預けられた命の尊さを分かち合う支援者でありたいと願っています。



母は脳腫瘍でがんとわかった時には全身に転移していました。「今一番したいことは、なあに？」痛み止めがほんの一瞬きいた日、ふと尋ねると「海が見たい」と…。ただ痛みは増すばかりで、最期まで願いを叶えることはできませんでした。あれから28年、無意識のうちに死に近い人々の側にいることを選択し「今一番したいことは何ですか？」とお尋ねすることは、わたしのグリーンワークだったように思います。お墓参り、娘の結婚式、絵筆を持つ方…。温泉に行きたいという方は特に多くて総勢40人となる車いす温泉ツアーは、5年連続で企画しました。

ある日、人工呼吸器をつけたALS患者さんと出会います。折しも大きな交通事故にあって、リハビリ中のことです。能登一周旅行、生と死の文化を豊かにするコンサート。まさに、マイナス×マイナス＝プラスの体験、願いごとを叶えることはとてもワクワクすることでした。あれから17年、前年はコンサートに参加した方が翌年にはスタッフで参加されるようになりました。

ぼぼぼの‘ぼ’は、people (人々) ぼぼぼの‘ぼ’は、place (場所) ぼぼぼの‘ぼ’は、product (創造)
大地から温かいものが湧いてきて人々を包み込むイメージが湧いてきて、ぼぼぼという言葉が生まれました。ぼぼぼねっとの仲間たちは、十人十色で、十位一体、経験豊かな、為すべき事を為そうとする愛をもって、おもしろがって為せる「偉大なるお節介」の実践者です。「出会い」、「語り合い」、「共に居て」、「共に活動する」中で、いのちのスープの会、金沢がん哲学外来、聞き書き講座、こころのオープンカフェ (ぼぼぼのいえ)、魂のいちばんおいしいところ (コンサート)、子育て支援、学生とのココチカフェ等の活動が生まれました。

3月31日(日)に小松市民センターで、パリヤソ (ピアノ 谷川賢作さん、ブルースハーモニカ 続木力さん) をゲストにお迎えして、障がい児・者と家族が中心となって企画している「魂のいちばんおいしいところ」のコンサートがあります。どうぞ、遊びにいらして下さい。



河井道記念 恵泉 がん哲学外来 グリーンライブ・カフェ

佐原 瑠美

私自身、医療の仕事をしている関係で、ガンで苦しんでおられる方々やその家族と日常的に接しています。しかし仕事を振り返る意味でも、「河井道記念 恵泉 がん哲学外来グリーンライブ・カフェ」のスタッフとしてボランティア・ワークができることの大切さを感じるようになりました。

私の仕事は、「限られた時間の中で、対象者に最大限のケア」をするのが目的です。一方、私に関わる「がん哲」の場合、あらかじめ決められたマニュアルはなく、スタッフと参加者は、全員が自己紹介をしたあと、自由に話し合いを続けます。もちろん参加者の方がより心を吐露しやすい雰囲気を作るのがスタッフの仕事ですから、来られる方のお話を傾聴することが基本になります。けれども、それに留まることなく、それぞれが自由に、自分の経験や、思い、参加の動機などを話すのです。そのことで、来られる方もより気軽に参加できる雰囲気が生まれているようにも思いますし、今までのところ、スタッフは司会役として、同時に心のサポーターとして、参加者を迎え入れることが出来ているように思います。参加者からかは、日常生活では話すことができないことを話せる場として、『参加してよかった』という声を多くいただいています。

私たちの「がん哲」は、多摩市を中心にしたボランティアメンバーと、恵泉女学園大学の関係者で共同運営しています。恵泉は園芸などが有名な大学ですから、がん哲で用意されているコーヒーやお茶などは、フェア・トレードで購入されたものを用意しています。一杯100円～200円で、それを飲むのも、飲まないのも自由。そのような自由な空間も魅力の一つです。またお茶やお菓子の持ち込みも大歓迎ですから、共通の悩みを抱える「友人」が、ひとつの場所に集まり、「一緒に問題を共有する時間」のようにも感じられるのです。

なにより会場となるのは、様々な種類の熱帯植物に囲まれた温室 (グリーンライブセンター) ですから、静かで落ち着いた、アットホームな雰囲気を作りだしているのでしょう。

新年明けて1月5日、お茶の水で開催されたメディカル・カフェに参加させて頂きました。昨年、樋野先生とお逢いして以来、とにかくメディカル・カフェに行きたいという念願が叶いました。

私は学生時代に創業して以来、40余年に亘り開発のお手伝いをしているコンサルタントです。様々な企業（クライアント）と契約して、新しい事業や商品を開発し、クライアントの経営を強化する、つまりクライアントがよくなるようにするのが仕事ですが、最初に樋野先生のお話を聞いた時、何か、共通するものを感じました。勿論、私はお医者さんではありませんし、医療の事などは分かりませんが、先生のされていることが、ほんの少し理解できた様な気がしたのです。先生のご見識やお考えの全てが分かったなどと大層な事を申し上げているのではなく、本質的に、先生も開発のお手伝いをされているのだとそう思ったのです。



実は今の時代、多くの企業は将来を悲観し、先の見えない経営環境に不安を感じています。ですから、私がクライアントに対して行う最初の仕事は、まずは見えない不安を共有し、次に、将来はどうあるべきかを語ることから始めるのです。上場企業も中堅・中小企業も同じです。皆、同じ様な悩みや不安を抱えているのです。

樋野先生は、企業ではなくて人間をどのように幸せにするか、つまり、人生の開発はどうあるべきか、それをご指導されているのではないかと思います。人間が病気になったり、困難に陥った時、先生は真正面から向き合い、受け入れ、どう生きるかを教えてください。それはまさに、人間はどうやって幸せに生きるかという、人生開発なのです。

後日、「偉大なるお節介症候群認定証」を頂き、茶目っ気たっぷりに人生開発を支援されている樋野先生を改めて好きになりました。これから精一杯、そのお手伝いをしたいと思っております。

◇おしらせ◇

「ええふりこき」から「偉大なるお節介」へ

日本赤十字秋田看護大学

中村 順子

30年後の医療を考える会 第7回市民公開シンポジウム

メディカルタウンの「響りのルネッサンス」

一喪失から再生への地獄から再構築へ

Event information for the 30-year medical planning symposium, including dates, location, and a map of the venue.

長かった東京での実践者としての生活から、5年半前に故郷秋田に戻って看護教員をしています。秋田に戻る直前に“30年後の医療の姿を考える会”と出会い樋野先生のおっしゃる“偉大なるお節介”という概念（！）を知りました。

私の現場は在宅でした。訪問看護師やケアマネジャーの仕事は“偉大なるお節介”なくしては成立しないかもしれません。私なりに“偉大なるお節介”とは、相手の方のニーズに応えようとする“お節介”であり、自分がしたいことをする自分本位の“余計なお世話”とは異なるものだと思っています。主語が相手なのか自分なのかの違いです。

秋田は高齢化率日本一です。30%を超えました。秋田を高齢者にとってすみやすい県、街にするには、いまでもまだ残っている地域の人々のつながりを支え、強化し、お互いを見守る共助、互助のコミュニティとして再構築することなのではないかと考えています。そのとき“偉大なるお節介”は欠かせないと思っています。

しかし、秋田の方は「ええふりこき」（見栄っ張り）と言われていて、他人が家の中に入ることを嫌い、互いに適度な距離があることを望むようです。

私は最近住民の方々にお話をする機会が増えていますが、そこでいつもお話しするのは“余計なお世話”ではなく“偉大なるお節介”をしよう、ということです。自分の経験や自分の思いで相手を決めつけない、ずかずか土足で入りこむのではなく、相手は何を望んでいるのか、どう暮らしたいのか、そこに思いを馳せよう、そして一歩踏み込んで行こう、ということです。秋田のような高齢化率の高い地域は、もはや“偉大なるお節介”に基づくつながり作りをしなければ、成立しないかもしれません。訪問看護やケアマネジャーのような専門家だけがつながり作りをするのではなく、住民みんなが“偉大なるお節介”という“概念”を知り、実践することが、今求められていると感じています。

30年後の医療を考える会 第7回市民公開シンポジウム 2013年2月17日 14:00～ JIA 日本建築家協会 1階ホール

編集後記

この世知辛い世に「お節介」なるものを好んでいたがる人がいるということに、涙が出るほど感動している編集人です。原稿のご協力を感謝！（星野 昭江）